

デザイナーズ・マンション



日本建築家協会会長

六鹿 正治

専門家ではない一般の人々にとって、免震構造とか免震装置といえば、高層マンションの購入を検討するときなどに意識するくらいのもかもしれない。しかし、日常無意識に接しているデザインの面白いあの建築この建築が、実は免震構造の恩恵があればこそ、そういう形で存在しているのだということを知っている人はほとんどいないのではないだろうか。

その一は国立西洋美術館。この建築がユネスコ世界文化遺産に正式登録されたのは2016年7月のことだ。日本での運動の中心であったのは日本政府のバックアップのもと、台東区をはじめ地元の方々だったが、実は運動は世界的な広がりをもっていた。なぜならこの建物は単独申請で登録認定されたのではなく、ル・コルビュジエの一連の建築作品の一つとして六カ国に点在する17の作品をまとめて「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—」としてフランス政府とル・コルビュジエ財団が中心となってユネスコに申請していたからである。

日本ではこの登録認定のおかげで、国立西洋美術館の建物そのものへの関心だけでなく、その設計者であるル・コルビュジエや、更にはその意を受けて日本側で設計に携わった建築家の前川國男、坂倉準三、吉阪隆正に対する関心も一般市民の間で高まったのである。

私は日本建築家協会に所属する一建築家として、既に故人となられたこれらの大先輩たちの若き日の熱意にあふれた仕事が、一般の人々に広く認識されたことを大変喜ばしいことだと考えている。

一方で、新耐震基準などができる以前のこの1959年竣工の建築の名作が、なぜ今も美しい姿できっちりと保たれているかの理由についても、しっかりと

認識をしておく必要があると思うのだ。

この機関誌の読者ならとうの昔にご承知のように、この建物は1997-1998年に行われた免震レトロフィットの工事によって、新しい耐震基準に適合させることが可能になり、多くの人々が集まる公共の文化施設として存続させることができたのである。さもなくば、コルビュジエ独特の伸びやかな空間はもはやここに存在しないか、または初めの設計にはなかった柱や梁をいくつか添えなければ安全な建物として存続しえなかったはずである。コルビュジエも前川・坂倉・吉阪も自分たちのデザインや空間が、冒されることなく、新しい技術によって構造的により安全な建物に、いつのまにか生まれ変わっていることに瞠目するに違いない。

その二は、歴史が下って現在の世代の日本の建築家の作品。以前、第9回の免震構造協会賞の作品賞の審査をさせていただいた中で、特に目を引いた建物があった。伊東豊雄設計の多摩美術大学図書館(八王子キャンパス)である。構造設計は佐々木陸郎が担当した。免震構造協会賞ということで予め「からくり」の存在を知った上で現地審査をしたのだが、それでもなお、軽やかに連続する華奢なアーチや動きのある内部空間に非常に新鮮な驚きを感じたものである。免震構造だからこそ実現可能なデザインがあることを目の当たりにした驚きとも言える。

このデザインは、雑誌で写真を見た建築の学生や若手建築家たちにきっと大きな影響を与えるなど思いつつ、彼らとその背後に免震構造があることを合わせてしっかり認識してくれるかどうかにも非常に気になった。技術とデザインの関係の奥深さ、そしてさらには現実的な諸条件の拘束の中でいかに折り合いをつけて実際の建築として作り上げていくかということを知ることができるかである。

構造としての安心安全は建築の基本的要件であるが、特に医療施設や高層集合住宅など、用途として安心安全を第一に打ち出すことの多い建物では、現実的条件の中での重要な選択肢の一つとして免震構造の採用が増えている。

一方で、多摩美術大学図書館のように新鮮なデザイン意図を安全確実に実現するための有効で不可欠な技術として免震構造を捉えることもできる。私はこれをデザイナーズ・メンシンと呼んでみたい。

私の所属する事務所では以前、黒川紀章と組んで国立新美術館の設計を行ったが、晩年の黒川のデザイン意図を最も明快に表現することになった建物前面のロビーをカバーする波打つガラスの表皮や無柱空間を安全確実に支持するのに免震構造は不可欠であった。これは第8回免震構造協会賞作品賞を受賞したデザイナーズ・メンシンの例である。

また、山口県の通称きらら元気ドームでは、空から見ると羽を広げて飛ぶ鳥のように見える白い膜屋根を、柱頭で免震構造が支える形で構造的な解決を図っている。この軽やかさの実現は膜をテンセグリット構造でぴんと張るだけでは不可能であったと考えられる。これは第4回免震構造協会賞を受賞している。

先述の伊東豊雄は、当選はしなかったものの、JVで提出した新国立競技場のb案において、スタジアムの白い大屋根を、同じく免震構造で支えることによって、神宮外苑の中空に軽やかに浮かべようと企てていた。

建築家の新鮮なデザイン意図の実現を安心安全という条件の中で確実に行う技術の一つとして今やなくてはならないのが免震構造である。日本の多くの優秀な建築家たちがデザイン意図を安心安全に実現するために免震構造の一つの有力なオルタナティブとして当たり前を考えるようになれば、デザイナーズ・メンシンによる建物が百花繚乱のように出現してくるかもしれない。

そのときに忘れてならないのは、建築家と協働する建築構造設計の専門家の存在であり、日本では多くの建築構造設計者が前提として一級建築士の資格を取得していて、さらに日本建築家協会の会員であることも多い。

建築構造の専門的技術者であり設計者であると同時に、いわゆる建築家の精神をあわせ持つておられ

る方々が多くいらっしゃる事に、いま日本建築家協会の会長をお役目としていただいている立場から、心からの敬意を払いたいと思う。

デザイナーズ・メンシンが盛んになって多彩なデザインが現実のものになることを願い、またその中で構造設計者の方々が、協働する建築家たちと同じ建築家精神で課題に向われることを心から祈りたい。そして巻頭文を締めくくるにあたり記述したいことがある。それは建築家精神の原点ともいべき言葉に近頃接したことである。

今年の5月にアメリカ建築家協会の年次大会がフィラデルフィアで行われ、JIA次期会長の立場で出席してきたが、そのときに非常に強く印象を受けたことがある。それは大会最終日の夜に行われるFAIA、すなわちAIA会員のなかでも特に実績や貢献で選ばれた年長メンバーであるフェローたちを召集する晩餐会でのこと。会自体は毎年数十人の新フェローを紹介することもあって、夫婦同伴の華やかで賑やかなものであるが、会の半ばに、やおら代表者が壇上にのぼってFAIAとしての祈願文を厳かに読み上げるのである。会は華麗な中にも、このときばかりは荘厳さが会場を覆う。そしてその祈願の内容は建築家精神の原点を自覚する謙虚さとあわせてナイーブなまでの使命感と自負に満ちたものであり、会員たちは自己のプロフェッションの重大さを確認しあうのである。

「みなさん、こんばんは。

しばし頭をたれて感謝の祈りを捧げましょう。

フェローシップ（フェローであること）とはこのプロフェッションがよりよくなるよう恩返しをすることです。

私たちのプロフェッションをより高める立場にあることを私たちが許されていることに感謝します。指導的立場のアーキテクトとして、私たちは単に風景を変える機会を得ているだけではありません。

私たちは人々の生活の仕方を変える機会をも得ているのです。

私たちは非常に深い方法で社会に貢献する手段を持っています。

そして私たちは毎日の生活を改善することに深く関わっています。

フェローとしての私たちは人々にリーダーだと認識

されています。
次世代への良き指導者となるべき機会を得ようとして
いる人だと思われています。
私たちのビジョンを通じてこのプロフェッションを
より高める人だと思われています。
私たちは建築の実務の様々な価値を代表し、発展を
支え、永続を促すことを追求するものであります。

私たちは感謝を捧げます。私たちこそ実践者だから
です。
私たちは感謝を捧げます。私たちこそ大きな影響を
与えていくからです。
私たちは感謝を捧げます。私たちこそフェローの集
まりなのです。
アーメン」